

ANNOUNCEMENTS

I. 役員の改選

評議員の改選：会則(1992年10月改正)にもとづき、本学会評議員の改選が行われた結果、下記のとおり98名の会員に委嘱(任期は2年間)された。

日本人類遺伝学会評議員

浅香昭雄	山梨医科大学保健学教室	近藤郁子	愛媛大学医学部公衆衛生学教室
阿部達生	京都府立医科大学衛生学教室	近藤喜代太郎	北海道大学医学部公衆衛生学教室
有馬正高	国立精神・神経センター武蔵病院	楠佳之	東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター
阿波章夫	放射線影響研究所遺伝学部	坂本博三	兵庫医科大学遺伝学教室
池内達郎	東京医科歯科大学難治疾患研究所	佐々木正夫	京都大学放射線生物研究センター
池本卯典	自治医科大学法医学・人類遺伝学講座	佐々木本道	(財)佐々木研究所
一色玄	大阪市立大学医学部小児科学教室	笹月健彦	九州大学生体防御医学研究所遺伝学部門
今泉洋子	厚生省人口問題研究所	佐藤孝道	虎の門病院産婦人科
今村孝	国立遺伝学研究所人類遺伝研究部門	佐藤千代子	放射線影響研究所遺伝学部
遠藤文夫	熊本大学医学部小児科学教室	清水信義	慶応義塾大学医学部分子生物学教室
大倉典司	日本家族計画協会遺伝相談センター	下沢伸行	岐阜大学医学部小児科学教室
大堂庄三	宮崎医科大学小児科学教室	十字猛夫	日本赤十字社中央血液センター
大濱紘三	広島大学医学部産婦人科学教室	鈴木康之	岐阜大学医学部小児科学教室
岡嶋道夫	東京都監察医務院	鈴木義之	東京都臨床医学総合研究所
岡村敏弘	由利総合病院小児科	鈴木薫	名古屋市立大学医学部産婦人科学教室
小笠原信明	愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所遺伝学部	孫田信一	愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所遺伝学部
萩田幸雄	大阪市立大学医学部産婦人科学教室	高橋幸利	国立療養所静岡東病院
萩田善一	富山医生物学研究所	高林俊文	東北大学医療技術短期大学看護学科
押村光雄	鳥取大学医学部生命科学科細胞工学	竹下研三	鳥取大学医学部脳神経小児科学教室
尾本恵市	東京大学理学部人類学教室	武部啓	京都大学医学部放射能基礎医学教室
折居忠夫	岐阜大学医学部小児科学教室	多田啓也	東北大学医学部小児科学教室
梶井正	山口大学名誉教授	田中亀代次	大阪大学細胞工学センターヒト体細胞遺伝生理学部門
金子安比古	埼玉県立がんセンター臨床検査部	千代豪昭	大阪府環境保健部
鎌田七男	広島大学原爆放射能医学研究所	塚原正人	山口大学医学部小児科学教室
上口勇次郎	旭川医科大学生物学教室	辻省次	新潟大学脳研究所神経内科学教室
北川照男	日本大学総合研究所	外村晶	東京医科歯科大学名誉教授
木田盈四郎	帝京大学医学部小児科学教室	中井博史	岩手県立中央病院小児科
木村資生	国立遺伝学研究所名誉教授		
黒木良和	神奈川県立こども医療センター		
黒田泰弘	徳島大学医学部小児科学教室		

中 込 弥 男	東京大学大学院医学系研究科人類遺 伝学講座	宝 来 聰	国立遺伝学研究所人類遺伝部
中 堀 豊	東京大学大学院医学系研究科人類遺 伝学講座	堀 雅 明	放射線医学総合研究所遺伝研究部
中 村 祐 輔	(財)癌研究会癌研究所生化学部	本 庶 佑	京都大学医学部医化学教室
橋 原 幸 二	岡山大学医学部小児科学教室	松 井 一 郎	国立小児病院小児医療研究センター 小児生態研究部
成 澤 邦 明	東北大学大学院医学系研究科病態代 謝学講座	松 田 一 郎	熊本大学医学部小児科学教室
成 富 研 二	琉球大学医学部小児科学教室	松 田 博	愛媛大学医学部小児科学教室
新 川 詔 夫	長崎大学医学部原研遺伝学部門	松 永 英	国立遺伝学研究所名誉教授
西 村 泰 治	熊本大学大学院医学研究科免疫識別 学講座	松 原 洋 一	東北大学大学院医学系研究科病態代 謝学講座
橋 本 知 子	兵庫医科大学遺伝学教室	松 本 秀 雄	大阪医科大学学長
浜 口 秀 夫	筑波大学基礎医学系人類遺伝学	美 甘 和 哉	旭川医科大学名誉教授
日 暮 真	東京大学医学部保健学科母子保健学 講座	三 木 哲 郎	大阪大学医学部老年病医学講座
福 嶋 義 光	埼玉県立小児医療センター遺伝科	三 澤 信 一	京都府立医科大学第三内科学教室
服 卷 保 幸	九州大学遺伝情報実験施設	三 輪 史 朗	(財)沖中記念成人病研究所
福 山 幸 夫	東京女子医科大学小児科学教室	森 正 敬	熊本大学医学部分子遺伝学教室
藤 木 典 生	福井医科大学第二内科学教室	安 河 内 幸 雄	東京医科歯科大学難治疾患研究所
藤 田 弘 子	大阪市立大学生活科学部人間福祉学 科	安 田 徳 一	放射線医学総合研究所遺伝研究部
古 川 研	群馬大学医学部法医学教室	柳 瀬 敏 幸	九州大学名誉教授
古 庄 敏 行	杏林大学保健学部臨床遺伝学教室	山 口 清 次	岐阜大学医学部小児科学教室
古 山 順 一	兵庫医科大学遺伝学教室	山 口 雅 也	佐賀医科大学内科学教室
		山 村 研 一	熊本大学医学部遺伝医学研究施設
		吉 田 廻 弘	北海道大学理学部動物染色体研究施 設
		和 田 義 郎	名古屋市立大学医学部小児科学教室

理事、監事の改選：会則にもとづき、新評議員による理事と監事の選挙が行われた結果、下記のとおり8名の各氏が選出され、委嘱された。

理事：梶井 正（山口大学名誉教授）
 笹月健彦（九州大学生体防御医学研究所）
 多田啓也（東北大学医学部）
 中込弥男（東京大学大学院医学系研究科）
 新川詔夫（長崎大学医学部）
 松田一郎（熊本大学医学部）
 監事：今村 孝（国立遺伝学研究所）
 岡嶋道夫（東京都監察医務院）

学会賞選考委員の一部改選：新評議員による学会賞選考委員の一部改選が行われた結果、新委員として下記の3名が選出された。

北川照男（日本大学駿河台病院）、浜口秀夫（筑波大学基礎医学系）、美甘和哉（旭川医科大学名誉教授）

（庶務幹事 池内達郎）

II. 「遺伝学と医学」I, II, III (井上英二編)の希望者への配布について

上記3冊の書は医学振興財団(現在の難病医学研究財団)が主催し、井上英二先生を主とした実行委員の企画と努力の下に、昭和54, 55, 56年の3回に亘って開催された一連の「遺伝医学セミナー」の記録です。

このセミナーに招かれ、講義を行ったすべての講師(第一線の研究者)29名の30編の論文を収録したものであります(共立出版発行)。第I巻は国外よりの3人を含む11人の著者、第II巻は国外よりの3人を含む9人の著者、第III巻は国外よりの4人を含む10人の著者からなっており、当時の現代遺伝学の最前線のトピックスが取り上げられており、現在でも貴重な資料だと思います。

この度、難病医学研究財団および井上先生の御厚意により、まだかなり多数ある残部を希望者にI, II, III巻一組を無料で配付して下さることになりました。

つきましては、希望者は書面で、「遺伝学と医学」I, II, III(井上英二編)一組を送ってほしい旨を明記し、送り先の住所、氏名、電話番号も記し、郵送料として520円の切手を同封して

〒101 千代田区神田小川町1-6-3 川新ビル5F 難病医学研究財団(Tel. 03-3257-9021)
宛、なるべく早めにお申し込み下さい。おそらく先着順に受け付け、残部が無くなった時点で打ち切ることになると思います。(理事長 三輪史朗)

III. 雑誌の交換について

この度Universiti Sains Malaysia(マレーシア理科大学)よりJpn J Hum Genetに対し雑誌交換の申し入れがあり、理事長とも相談のうえ応じることになりました。同大学の発行になる*J Bioscience*のVol. 1, No. 1とNo. 2, Vol. 2のNo. 1を受領、原本は東京医科歯科大の本学会事務室にて保管中です。閲覧御希望の方はお申し出下さい。(中込弥男)

IV. 「ヒトゲノム解析と共役した遺伝病家系研究の推進小委員会」について

文部省科学研究費補助金創成的基礎研究費「ヒトゲノム解析研究」(代表:大阪大学松原謙一教授)は3年目を迎えた。本年度から総括班の中に上記小委員会が新しく設けられ事業を行うことになった。松原総括班長はゲノム解析ニュースVol. 3, No. 1の中で次のように解説している。

「ヒトゲノム解析の進展と遺伝病家系の研究の進展との共役は我国のゲノム解析計画の推進に不可欠である。ところが、我国の遺伝病家系の研究には小規模なグループも多く、その努力や成果が活かし切れない、あるいは孤立しているケースも散見されている。そこで総括班の付帯事業として、これら研究者の分布調査、横断的連絡の会設立に向けての援助などを行い、将来的には独立した科学研究費申請グループに至る展開を図る、総合研究(B)に類似した役割を期待する(草の根的に行っていただく)。さらに、現在臨床検査企業が抱えている膨大なデータをプライバシーを侵害することなく純粋研究に活用する道がないかなど検討を行う(既存のデータ活用)。このために、三輪史朗氏(沖中記念成人病研究所)の下に小委員会を設け、上記目的に沿って調査、検討会、連絡打合せ会、必要と認める資料収集整理、研究補助などの活動を行っていただく。」

大役をお引受けし、計画を作成中ですが、本学会会員の協力が不可欠です。御意見・御提案・御希望を是非私迄お寄せ下さい。とくに具体的に家系をもち、その後の研究の進め方をどうすべきか、という方があれば、良い研究体制を作ってお役に立ちたいと思います。(理事長 三輪史朗)

V. 脳障害研究国際シンポジウムならびに国際賞

主催：Oasi Institute for Research on Mental Retardation and Brain Aging

A) 第3回脳障害国際シンポジウム

開催日：1994年9月28～30日

場所：ツシリー島トロイナ（イタリア）

テーマ：ダウン症候群・アルツハイマー病・21番染色体

プログラム

セッション1 ダウン症候群と21番染色体 セッション3 神経病理・疾患モデルマウス

セッション2 アルツハイマー病 セッション4 病態・画像診断

B) 1994年度国際賞

テーマ：ダウン症候群・アルツハイマー病・21番染色体

賞金：1) 25,000米ドル

2) 第3回脳発達障害シンポジウムへの特別講演招待

3) 受賞論文を *Developmental Brain Dysfunction* に掲載

応募条件：未発表の原著論文であること。

応募締切：1994年2月28日 トロイナ必着。

詳細は下記のいずれかにご連絡ください。

主催者連絡先：Dr. R. Ferri

Via Conte Ruggero 73, I-94018 Troina, Italy

Fax：39-935-65-3327

国内連絡先：〒113 東京都文京区本駒込 3-18-22 東京都臨床医学総合研究所 鈴木義之

電話：03-3823-2101 ファクス：03-3823-2952

日本学術会議だより №.29

「学術分野における国際貢献についての基本的提言」を採択

平成5年5月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る4月21日から23日まで第116回総会を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、同総会の議事内容及び同総会で採択された「学術分野における国際貢献についての基本的提言」等についてお知らせいたします。

日本学術会議第116回総会報告

日本学術会議第116回総会（第15期・第5回）が、4月21日～23日の3日間にわたって開催された。

総会の初日の午前には、会長からの前回総会以降の経過報告に続いて、各部、各委員会等の報告が行われた。次いで、今回総会に提案されている2案件について、それぞれ提案説明がなされた後、質疑応答が行われた。

午後からも提案案件に対する質疑応答が行われた後、引き続き各部署が開催され、午前中に提案説明された総会提案案件の審議が行われた。

総会2日目の午前には、前日提案された2案件及び緊急に提案された1案件の審議・採決が順次行われた。

まず、「国際対応委員会の改組について(申合せ)」が採択された。これは、学術の国際化の急速な進展に伴い、国際学術団体及び国際学術協力事業への対応の重要性がますます増大してきており、日本学術会議としてもその職務を遂行する上で、学術の国際化に関する状況の迅速かつ的確な把握が不可欠であるという観点から、より広範囲にわたる国際学術情報の収集と、それに基づく適切な対応ができるよう、国際対応組織の充実強化を図るために、必要な措置を講じたものである。

次いで、「学術分野における国際貢献についての基本的提言」が採択された。本件については、日本学術会議第15期活動計画の中の重点目標として掲げられており、また、一昨年秋の第113回総会において内閣官房長官から、「学術研究の分野で我が国がどのような国際的貢献をなすべきかについて全学問領域から総合的に検討し、意見を出すよう」求められ、以来、日本学術会議における重要案件として鋭意審議してきたものである。

提言は、1. 学術分野における国際貢献の意義、2. 学術分野における国際貢献の在り方、3. 学術分野における国際貢献を進めるための提案という構成内容になっており、日本学術会議は、今後とも、本提言に基づき、具体的な諸課題について検討していくこととしている。

最後に、上記の提言に基づき、日本学術会議は、国際貢献のための新しいシステムを構築するための具体的方策を直ちに検討し、その速やかな推進を図るといった内容の「学術分野における国際貢献についての基本的提言に関する附帯決議」が採択された。

また、「学術分野における国際貢献についての基本的提言」に関する会長談話を22日付けで発表した。

午後からは、現在、常置委員会、特別委員会で審議されている懸案事項について、自由討議が行われた。

総会3日目は、午前には各特別委員会、午後は各常置委員会・国際対応委員会がそれぞれ開催された。

なお、近藤会長が、4月22日に河野内閣官房長官と、また、同27日に宮澤内閣総理大臣とそれぞれ会見し、「学術分野における国際貢献についての基本的提言」を手渡すとともに、同提言について報告した。

学術分野における国際貢献についての基本的提言（抜粋）

（前文略）

1. 学術分野における国際貢献の意義

（本文略）

2. 学術分野における国際貢献の在り方

（本文略。項目のみ）

- (1) 対等・互恵の原則に基づいた国際学術協力の強化
- (2) 国際学術協力の積極的発議等
- (3) 人材育成への協力による国際貢献の推進
- (4) 我が国の学術情報の提供・紹介の促進
- (5) 学術に関する国際団体への対応強化

3. 学術分野における国際貢献を進めるための提案

前節で述べた我が国の学術分野における国際貢献の在り方を踏まえ、これを推進していくために、以下の事項を提案する。

(1) 我が国からの情報提供機能等の充実・強化

① 学会の支援・育成

我が国の学会は、高等教育研究機関や産業界の研究発表の発表の場として重要な役割を果たしてきた。また、研究者相互の活発な国際交流等を通じて、情報の提供に努めているところである。しかしながら、ほとんどの学会は、資金の不足から、必要な活動も十分にできない状況にある。

学術分野における国際貢献という観点において、非政府機関（NGO）としての学会の果たす役割は極めて大きく、それらがある情報提供機能を最大限に発揮できるように、学会の支援・育成を図る必要がある。

② アジア地域における学術研究に関する連携の強化

我が国と地理的・歴史的・文化的な関係の深いアジア地域の学術の発展に資するため、アジア地域の科学者や学術研究機関の間の学術研究ネットワークを拡充・強化することが必要である。また、将来的には、アジアの学術振興のための国際的な組織の在り方について、関係各国の科学者と協議していく必

要がある。

(2) 国際学術交流のための支援の充実

① 学術研究機関の整備等

新しい知識の創造と発展は、優れた研究者が集い、切磋琢磨するところから生まれるものであり、研究者の未知への挑戦に対して最も適切な施設・資金・支援システムなどの研究環境を提供することが必要である。したがって、全世界の研究者が日本で研究することに魅力を感じ、充実した研究生活を送れるように、学術研究機関の整備及び適切な運営を図るべきである。

② 来日研究者・留学生への支援の充実

学術分野における国際貢献の第一歩として、各国の人材育成への協力、とりわけ来日研究者・留学生の支援に十分な配慮がなされなければならない。したがって、内外における日本語教育の充実や、来日研究者・留学生の住居、日本人研究者・学生や地域の人々との交流を可能とする交流施設など生活・文化施設の整備・充実を早急に図るべきである。

③ 海外派遣研究者への支援の拡充

国際学術交流は、相手国の国情に応じた総合的配慮の下に行われる必要がある。したがって、その国の研究者との恒常的な連携・協力を維持するとともに我が国からの海外派遣研究者が必要とする各種情報の提供や連絡・調整などでもできる人材の当該国への配置など、海外派遣研究者の支援体制の拡充を検討する必要がある。

(3) 学術分野における国際貢献のための新しいシステムの構築

国際的な学術協力については、我が国においても、既に多くの機関がその努力を重ねているところである。しかしながら、投入されている資金等そのための支援は、質・量ともに、未だ国際的な要求に定める水準にまで達しているとは言えない。しかも、現在個別に推進されている学術協力の相互の連絡・調整は、必ずしも十分ではなく、我が国の総力を挙げてこれを推進しているとは言えない状態にある。

また、今後ますます増えていくと思われる各種の国際的な学術協力プロジェクトの立案や協力、参加、推進については、これまで以上に、科学者の総意を反映しつつ、総合的かつ適切な判断を機動的になし得る場を確保しなければならない。

さらに、我が国が国際的な学術協力のための諸施策を強力に推進するためには、科学者の力のみならず、政府・産業界の協力、更には国民の理解等総合的な支援が必要である。

これらの問題点を改善し、学術分野において国際社会の期待に応える貢献をなし得るように、国民の理解の下に、諸課題の整理、必要な資金の確保・配分等を行う新しいシステム（例えば「学術協力機構」）を構築するなど、今後真剣に検討を進める必要がある。

終わりに

日本学術会議は、人類共通の資産としての学術の発展こそが人類の繁栄と世界の平和の礎となるとの見地から、本提言を取りまとめたものである。

なお、日本学術会議は、今後とも、本提言に基づき、内外の科学者を始め、広く関係各方面の意見を聴きながら、具体的な諸課題について引き続き検討していくことを付言したい。

平成5年(1993年)度共同主催国際会議

日本学術会議では、我が国において開催される学術関係国際会議のうち毎年おおむね6件について、学・協会と共同主催している。

本年もまた、6件の国際会議を共同主催することとしており、その概要は、次のとおりである。

◆第7回太平洋学術中間会議(6月27日～7月3日)

太平洋地域の住民の繁栄と福祉に直接関わる学術上の問題に関する研究を進展させるため、討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として宜野湾市(沖縄コンベンションセンター、沖縄都ホテル、メルパルク沖縄)において開催される。

参加予定人数500人(国外300人、国内200人)参加予定国数29か国。

◆第6回国際気象学大気物理学協会科学会議及び第4回国際水文学協会科学会議合同国際会議(7月11日～23日)
気象学、大気物理学及び陸水・水文学に関する研究を進展させるため、討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として横浜市(横浜国際平和会議場)において開催される。

参加予定人数1,500人(国外700人、国内800人)、参加予定国数68か国。

◆第15回国際植物科学会議(8月23日～9月3日)

植物学に関する研究を進展させるため、討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として横浜市(横浜国際平和会議場)において開催される。

参加予定人数4,000人(国外1,500人、国内2,500人)、参加予定国数81か国。

◆第24回国際電波科学連合総会(8月23日～9月3日)

電波学に関する研究を進展させるため、討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として京都市(国立京都国際会館)において開催される。

参加予定人数1,200人(国外800人、国内400人)、参加予定国数49か国。

◆アジア社会科学研究協議会連盟第10回総会

(9月5日～11日)

アジア・太平洋地域における社会科学の教育、研究、訓練及び普及を促進するため、討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として川崎市(かながわサイエンスパーク)において開催される。

参加予定人数120人(国外60人、国内60人)、参加予定国数17か国。

◆第21回国際純粋・応用物理学連合総会(9月20日～25日)

物理学を進展させるため、討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として奈良市(奈良県東公会堂)において開催される。

参加予定人数300人(国外150人、国内150人)、参加予定国数41か国。

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(3403)6291(代)

日本医学会だより

JAMS News

1993年 4月 No. 9

日本医学会
千113 東京都文京区本駒込2-28-16
日本医師会館内 TEL 03-3946-2121

第60回日本医学会定例評議員会

第60回日本医学会定例評議員会が、1993年2月23日(火)、午後1時30分から日本医師会館3階小講堂において開催された。

冒頭、日本医師会の村瀬会長から挨拶があった。村瀬会長は挨拶のなかで「今回の医療法改正で医師の標榜する診療科名について、(これまで)国会で決めていたものが、(これからは)医療社会で決める形になった」。これにより「医療社会の責任が非常に重くなった」とし、今後とも医師会と医学会とが「車の両輪のようになって」協調していく必要性を説いた。

続いて挨拶に立った森会長は「日本医学会のあり方」として、他者(すなわち社会であったり、ときには政府であったり)から「何かを求められた場合には、誠心誠意それに応えていこうと考えて」いることを明らかにし、そのためには「種々の意味での実力」を身につけていかなければならないと、今後の方向性を示した。

また森会長は、日本消化器病学会から提起された医学界と薬業界等との連携のあり方をめぐる課題についても「正面から取り組む」気持ちを表明した。

主な議題は、次のとおりであった。

【報告事項】

1. 第24回日本医学会総会の準備状況

第24回日本医学会総会の飯島宗一会頭ならびに齋藤英彦準備委員長から、1993年4月7、8、9の3日間、名古屋市を中心に開催が予定

されている上記総会の準備状況が報告された。学術プログラムの検討状況、登録方式、募金計画等についての基本的な考え方が述べられ、同時にポスターも紹介された。

2. 日本医学会シンポジウム

1992年度は、第94回(「免疫学の進歩」)、第95回(「小脳」)、第96回(「骨髄移植」)の3回のシンポジウムが開催された。また、1993年度には総会と総会の中間年にあたる特別シンポジウムを開催することが正式に決まり、第1回は、1993年8月28、29の両日、仙台市で行われる(別項参照)。

3. 医学用語管理事業

『日本医学会 医学用語辞典 和英』は1993年の10月に刊行される予定。また文部省が進めている用語制定事業に、医学用語管理委員会の委員を中心に参画していく予定。

4. 認定医制についての三者懇談会

標記の懇談会は、日本医学会が日本医師会と学会認定医制協議会に呼びかけて1986年に第1回が開かれ、本年度は第13回と第14回が開催された。1992年8月、日本医師会が「認定医に関する日本医師会の見解」を発表し、さらに日本医学会の森会長と学会認定医制協議会の出月議長が連名で「認定医制度について(私案)」を第13回の懇談会に提示した。こうして三者それぞれの見解が明確にされたことで、認定医制問題は具体的な第一歩を踏み出した。

三者の一致点は①認定医制の目的は医療に携わる医師の質の向上にあり、診療報酬問題など

とは第一義的には関連しないこと、②認定医・専門医制度については各学会の主体性を尊重すること、③三者による認定はまず基本的診療領域に属する十数科目から始める等である。

5. 日中医学大会

標記大会は1992年11月1～5日、日本医学学会と中華医学会の共催で、3,300名余の参加者を得て、北京において盛況裡に行われた。なお日本側からは1,000名を超える人々が出席した。

6. 「医学界と薬業界等との連携」についての打合せ会

1992年8月、日本消化器病学会から「医学界と産業界との協力関係についてのガイドライン作成について」の申し入れがあった。これに応じて医学会では、医学会の役員と内科学会、外科学会、産婦人科学会、小児科学会、消化器病学会の代表からなる標記打合せ会を2回開き、現状の問題点などについて討議した。1993年度には委員会に昇格させ、ガイドラインを作成する方向で検討を進めている。

【協議事項】

1993年度日本医学学会事業計画では、第24回日本医学学会総会の準備、日本医学学会シンポジウムおよび特別シンポジウムの実施、医学用語管理事業である医学用語辞典と英版の刊行ならびに文部省の医学用語制定事業への参画、日本医師会医学賞・医学研究助成費選考委員会の実施、シンポジウム記録集など種々の刊行物の発行、などの事業計画が承認された。

なお、草間用語管理委員長から、文部省の医学用語制定事業に参画するに際し、長期的な展望に立って用語の整理・統一を図りたいので、各分科会の一層の協力を求める旨、発言があった。

【その他】

森会長は日本医学学会総会の将来の開催地問題について特に発言した。「これまでは慣習的に東京、京都、大阪、名古屋の四大都市で開かれていたが、幹事会の意見としては、今日の状況を考えれば必ずしもこれら四都市に限定する必要

はなかろうということである。如何なものだろうか」また「次回の総会(25回)については、これまでは総会開催年の評議員会で決定していたが、この慣習にもとらわれる必要がないのではないか」と述べた。そのうえで、25回総会開催地ならびに会頭立候補の希望があれば、事務局まで名乗り出てほしい旨の発言をした。

日本医学学会シンポジウム

<第97回シンポジウム>

メインテーマ：遺伝子と医学

日時：1993年7月2日(金)9:45～17:30

場所：日本医師会大講堂

組織委員：村松正實、谷口維紹、尾形悦郎

演者：I. 遺伝子発現調節と病態/岡山博人, 中村祐輔, 吉田光昭, 谷口維紹, 山本雅之, 村松正實, 中西重忠

II. 遺伝子疾患モデル研究の新展開/勝木元也, 近藤寿人, 相澤慎一, 山村研一

日本医学学会特別シンポジウム

メインテーマ 「医と法」

日時 1993年8月28日(土)9:30～17:00

29日(日)9:30～12:30

場所 仙台国際センター

組織委員 委員長・石田名香雄/副委員長・久道 茂/委員・青井秀夫, 阿部純二, 伊藤恒敏, 今田 拓, 大槻昌夫

日本医師会医学賞・医学研究助成費

1993年度日本医師会医学賞・医学研究助成費の募集概要は、以下のとおり決定した。

1) 医学賞は基礎・社会・臨床部門を通じ3名に各300万円が、医学研究助成費は基礎・社会・臨床部門を通じ15件に各150万円が授与される。(いずれも日本医師会員が応募条件)

2) 推薦書類は4月中旬に日本医学学会分科会長, 医科大学長・医学部長, 関係研究機関長に依頼する。

3) 推薦の締切は7月5日(月)必着